

## *The Parlement of Foules* の文体

佐々木 富美雄

このノートは Geoffrey Chaucer の *The Parlement of Foules*, 699 行の詩をどう見て行こうとするかをこの詩の前半にその motif があるとの考えからまとめてみたものである。<sup>(1)</sup>

*The Parlement of Foules* (以下 PF とする) の製作年代は大体 1382 年前後ということになっている。PF の l. 117 で見られる “north-north-west” から当時の Venus が見える年は 1382 年となるというのが明確でない。<sup>(2)</sup> しかしこの年代の頃には Chaucer が *The Book of Duchess*, *The House of Fame* を書き、しだいに技法に磨きをかけながら *The Parlement of Foules* を書いている。形式としては、三つ共、dream allegory であって、テーマとしては love-vision という Chaucer にとって大切な主題が一貫して見られる。しかしながらこの愛の探題は仲々解決が得られなかった。三作品共に明確な解決はしていないが PF においては一応この地上的世俗的な愛を謳歌していることになる。これと同時にどうしても終生のテーマである Chaucer にとって auctoritee and pref の問題が浮上して来る。<sup>(3)</sup> auctoritee (=authority) は権威の事であり、彼はその根拠をクラシックス古典の書に求め、pref (=proof) は Chaucer にとっての experience とでもいうべき経験にその証明を求めている。彼は生涯を通じての読書家であったし、仕事が終わってからでも如何に読書に励んだかは *The House of Fame*, ll. 652-660 に書かれている。この PF においても auctoritee は Cicero の *Somnium Scipionis* であり、その読書の内容が 29—84 行目までにまとめられている。これがこの PF の基調と

なっており、それと対比するかの如く技巧的愛つまり *courtly love* と世俗的愛 *Nature* が司祭する世界とがこの詩の中にまとめて描出されている。

さて PF は次のように始まる。

The lyf so short, the craft so long to lerne,  
Th'assay so hard, so sharp the conquerynge,  
The dredful joye, alwey that slit so yerne:  
Al this mene I by Love, that my felynge  
Astonyeth with his wonderful werkyng  
So sore, iwis, that whan I on hym thynke,  
Nat wot I wel wher that I flete or synke.

For al be that I knowe nat Love in dede,  
Ne wot how that he quiteth folk here hyre,  
Yit happeth me ful ofte in bokes reede  
Of his myrakles and his crewel yre.  
There rede I wel he wol be lord and syre;  
I dar nat seyn, his strokes been so sore,  
But "God save switch a lord!" — I can na moore.

Of usage — what for lust and what for lore —  
On bokes reede I ofte, as I yow tolde.  
But wherfore that I speke al this? Nat yoore  
Agon, it happede me for to beholde  
Upon a bok, was write with lettres olde,  
And therupon, a certeyn thing to lerne,  
The longe day ful faste I redde and yerne.

(PF : ll. 1-21)

Hippocrates まで溯ることが出来る格言で始まる PF はこの三スタンザでも知られる如く全面的に中世の *literary convention* に準拠したもので

ある。三スタンザばかりではなく 699 行を通して極めて convention に依拠していることは諸研究家が指摘しているところである。それにもかかわらず何故この PF は興味深く読者をして引きつけるのであろうか。これからすこしそれを見てみたい。

三スタンザを見ただけでも contrast と repetition が多い事に気が付く。また 3 行目の “The dredful joye, alwey that slit so yerne:” は現実の愛のはかなさを述べている。この ‘dredful joye’ は愛の探題の最後の作品というべき *Troilus and Criseyde* にも使用されていることは注目に値する。<sup>(4)</sup> この関係から見ると愛の問題こそ Chaucer の大きなテーマの一つであった事がわかるのである。そしてこの愛こそ不思議な働きをするものだとして述べている。それを思うと自分はどうなっているか (PF 1. 7) わからぬ状態であると訴えている。古人の言葉を引用した Chaucer は narrator としての自分は本当の愛を知らない (別ないい方で経験していないとっていいかも知れぬ) とすらすらと逃げている。ただ愛の神の ‘his myrakles and his crewel yre’ については「書物」で読んだことがあるといい、第 3 スタンザになると何故書物を読むのかということについては ‘Of usage — what for lust and what for lore —’ (習慣からで、いわば楽しみと学問のため) であるという。ここでも小さいことながら and を中心にした表現で聞く者に訴えている。

さて詩人は最近古い文字で書かれた本 (PF: 1. 19) が手に入り, “And therupon, a certeyn thing to lerne,/ The longe day ful faste I redde and yerne.” だという。つまり終日、この書を読んだわけである。この a certeyn thing とは何んであろうか。この不明の所がいい。別な表現でいう曖昧性がいいのだ。逆に詩自体にサスペンションが生れるのである。愛の探題を目的としている Chaucer 自身もこのことについては曖昧模糊としたものしか持ちようがなかったのではないか。また音声の上からも so が 6 回も使用され、加えて assay, astonyeth, sore, synke が流れを一層

なめらかなものになっている。こうした対照表現と反復表現ばかりでなく詩人の愛の主題が Chaucer の語彙選択に大きく影響している事は当然である。<sup>(5)</sup> 第 2 スタンザの *so sore* (l. 6) がその音の響きを忘れぬ位置 13 行目に *syre / sore* の *couplet* を作っている。これらの効果は文体というより音体とっていいのかも知れない。

さて詩人は *auctoritee* を求めるのである。

For out of olde felde, as men seyth,  
Cometh al this newe corn from yer to yere,  
And out of olde bokes, in good feyth,  
Cometh al this newe science that men lere.  
But now to purpos as of this mater ;  
To rede forth hit gan me so delite,  
That al that day me thoughte but a lyte.

(PF : ll. 22-28)

その *auctoritee* たる古典から「古い畑から、人がいうのに、年々新しい穀物がとれ / そして古い書物から、人が学ばねばならぬ新しい知識」が出るのだという。この PF にあって古典とは *Tullyus of the Drem of Scipioun* であった。Scipio の夢は PF では ll. 29-84 までにまとめられている。これが PF に統一を与えているか、いないのかの解釈の岐路になっている。また聖書積義学的解釈もなされていることは周知のことである。<sup>(6)</sup> 私はこれはこの後 Nature の司祭する鳥の会議を理解する上で大切な場面であるという立場である。これこそこの詩の統一になくてはならないものである。

Scipio の夢とは何であったらうか。

Thanne telleth it that, from a sterry place,  
How Affrycan hath hym Cartage shewed,  
And warnede hym befor of al his grace,

And seyde hym what man, lered other lewed  
That lovede commune profyt, wel ithewed,  
He shulde into a blysfyl place wende,  
There as joye is that last withouten ende.

(PF : ll. 43-49)

Scipio の夢の中に Affricanus が現われ、ある星の場所から地上のカルタゴを見せるというのである。そして commune profyt をなす者は blysfyl place へ入ることが出来ると教えられる。<sup>(7)</sup> どちらの事も曖昧模糊としている。これは *The House of Fame* の 1. 488 においてリビヤの荒地をさ迷っている時 “eagle” (権威の使者) が人間の声で詩人に呼びかけ、日頃の報奨として ‘the house of fame’ を案内するのに似ている。<sup>(8)</sup> この commune profyt とは当時よく英国国会で言われたらしいが依然として曖昧である。これは前にも述べた a certeyn thing (1. 20) と共に気になる言葉ではある。

Thanne axede he if folk that here been dede  
Han lyf and dwellynge in another place.  
And Affrican seyde, “Ye, withouten drede,”  
And that oure present worldes lyves space  
Nis but a maner deth, what wey we trace,  
And rightful folk shul gon, after they dye,  
To hevене; and shewede hym the Galaxye.

Thanne shewede he hym the lytel erthe that here is,  
At regard of the hevenes quantite;  
And after shewede he hym the nyne speres,  
And after that the melodye herde he  
That cometh of thilke speres thryes thre,  
That welle is of musik and melodye  
In this world here, and cause of armonye.

(PF : ll. 50-63)

この九層の天界の樂の声を聞くことが出来る者こそこの地上での人間の variety に富んだ愛の調べを聞くことが出来るのである。これは更に発展し次作の *Troilus and Criseyde* の Troilus の死後の悟りの場面にも共通している。

And whan that he was slayn in this manere,  
His lighte goost ful blisfully is went  
Up to the holughnesse of the eighthe spere,  
In convers letyng everich element ;  
And ther he saugh, with ful avysement,  
The erratik sterres, herkenyng armonye  
With sownes ful of hevenyssh melodie.

And down from thennes faste he gan avyse  
This litel spot of erthe, that with the se  
Embraced is, and fully gan despise  
This wrecched world, and held al vanite  
To respect of the pleyn felicite  
That is in hevene above; and at the laste,  
Ther he was slayn, his lokyng down he caste.

(*Troilus and Criseyde*: Book V ll. 1807-1820)

この高く清浄な場所から眺める地上と地上の人間はなんとあわれなものか。Scipio の夢においてもカルタゴというけれど如何に小なるものかが理解出来たのである。やがて詩人は終日の疲れのためうとうとし始める。しかし詩人の疲れは単なる労働のためではない。

The day gan faylen, and the derke nyght,  
That reveth bestes from here besynesse,  
Berafte me my bok for lak of lyght,  
And to my bed I gan me for to dresse,  
Fulfyld of thought and busy hevynesse ;

For bothe I hadde thyng which that I nolde,  
And ek I nadde that thyng that I wolde.

(PF : ll. 85-91)

日が暮れて読めなくなるのである。床につくわけだが、詩人は心も頭も重い。その理由を ll. 90-91 の言葉で表現している。“For bothe I hadde thyng which that I nolde, / And ek I nadde that thyng that I wolde.” と。これは一体なんであろうか。「自分が欲していない物を得、 / そしてまた欲していたものを手にしなかった」ためである。auctoritee は満足な解答を与えなかったであろうか。

But fynally, my spirit at the laste,  
For wery of my labour al the day,  
Tok reste, that made me to slepe faste.  
And in my slep I mette, as that I lay,  
How Affrican, ryght in the selve aray  
That Scipion hym say byfore that tyde,  
Was come and stod right at my beddes syde.

The wery hunttere, slepyng in his bed,  
To wode ayeyn his mynde goth anon ;  
The juge dremeth how his plees been sped ;  
The cartere dremeth how his cartes gon ;  
The riche, of gold; the knyght fyght with fon ;  
The syke met he drynketh of the tonne ;  
The loveere met he hath his lady wonne.

(PF : ll. 92-105)

しかし詩人の心は「権威」の意図する方へと流れて行く。夢の中に auctoritee の化身 Scipio が夢見た時と同じ姿で枕辺に立つのである。

Can I not seyn if that the cause were

For I hadde red of Affrican byforn,  
That made me to mete that he stod there;  
But thus seyde he: "Thow hast the so wel born  
In lokyng of myn olde bok totorn,  
Of which Macrobye roughte nat a lyte."  
That sumdel of thy labour wolde I quyte."

(PF: ll. 106-112)

“That sumdel of thy labour wolde I quyte.”と言われる詩人は 90-91 行の問題をここで解決しようというわけである。その世界は夢に出て来る愛の園である。<sup>(9)</sup> 園に入る前に詩人は二つの扉、黄金色と黒色とに書かれたものを見ているうちに詩人は入っていいものか進退に迷っているが、お前は関係ないとばかり夢の中の *Affricanus* は詩人を押し入れてしまうのである。ここで PF の主題へと進行する。夢本体そのものの描写は 113-693 行までになるが愛の園では *Venus* (PF: l. 261) は *Nature* に比して小さく描かれている。問題は *Nature* の司祭する鳥の会議である。時あたかも *Seynt Valentynes day* (PF: l. 322) であり、自然の生きとし生きる者の営みの日でもある。森の象徴と共に *Nature* はすべてに平和と秩序を与えるべくこの *St. Valentine's Day* に鳥の会議を司祭すること、会議が森の中で行われること、これが主題であり、この PF の *motif* でもある。これが生きとし生きるものへ、地上愛、つまり世俗的な *variety* に富んだ愛の諸相を伝達することになると思われる。文体はそのようなテーマの下に生れて来るものである。この作品は実に面白く、素晴らしいものである。導入の部分のみの主題だけを追って見たが、何度でも見直させる力をこの作品は持っている。その力は文体にあるように思う。それは *Nature* という *key-word* を中心とする文体である。

#### NOTES

- (1) このノートに使用した引用は下記のテキストによる。



F. N. Robinson, *The Works of Geoffrey Chaucer* 2nd ed. London, Oxford University Press 1957.

Cf. *The Parlement of Foules* を扱ったものに下記の拙論がある。

Caesura and 'and' in *The Parlement of Foules* 中京大学文学部紀要 6-1 1971.

- (2) Beryl Rowland, *Companion to Chaucer Studies* Oxford 1968.  
Donald Baker, *The Parliament of Fowls* p. 435.
- (3) Cf. John Lawlor, *CHAUCER* Hutchinson University Library London 1970.
- (4) Cf. *Troilus and Criseyde* Book 11 ll. 775-6.  
"May I naught wel in other folk aspie  
Hire dredful joye, hire constreinte, and hire peyne?"
- (5) Cf. 田中幸穂「*Parlement of Foules* の対照表現」 「片平」 中部片平会 第2巻 1966  
柴田良孝「*The Parlement of Foules* に於ける反復表現」 東北学院大学 論集 英語英文学 第60号 1973.
- (6) Cf. J. S. P. Tatlock, *The Mind and Art of Chaucer* Gordian Press, New York 1966 pp. 65-70.  
W. H. Clemen, *Chaucer's Early Poetry* Translated by C. A. M. Sym Methuen, London 1968 pp. 122-169.  
生地竹郎編 チョーサーとその周辺 二 「百鳥の集い」 pp. 45-64.
- (7) Cf. Franz Cumont, *Astrology and Religion among the Greeks and Romans* Dover Publications New York 1960 pp. 98-99  
"To all those who have saved, succoured, or exalted their father-land, there is assigned a fixed place in heaven, where they will enjoy everlasting bliss, for it is from heaven that they who guide and preserve states have descended, thither to reascend."
- (8) Cf. 拙論 *The House of Fame* の主題と文体 片平 第19号 1983.
- (9) Cf. Ernst Robert Curtius, *European Literature and Latin Middle Ages* Translated from the German by William R. Trask Harper & Row 1963 pp. 183-202.

(1985年7月19日 受理)